

## 高齢期の生活と学習

南 本 長 穂  
(愛媛大学)

### はじめに一問題の所在

高齢期の生活をいかに充実したものにしていくか。この課題は、高齢期に現在ある人、あるいは、近い将来に高齢期を迎える人にとって切実で重要な課題である。もちろん、生活の社会的側面（福祉、医療、家庭での老人扶養等）を充実させていくだけでは、この課題に対応できない。生活全体にわたる広い視野が必要である。

周知のように、わが国の高齢化社会は戦後から今日までの出生率の低下と平均寿命の延長によって生みだされてきた。総人口に占める高齢者の比率が上昇するとともに、高齢者の実数も大幅に増大する傾向にある。すなわち、この世に生まれた子供の大多数が死亡することなく健やかに成長し、長寿がかなえられる。このことは、言うまでもなく、個々人の願いや人類の普遍的な夢が実現されたともいえる社会、こうした特徴をもつのが、高齢化社会である。

高齢化社会への移行は、それ以前の社会に比べて、高齢者の生活にさまざまな影響を及ぼしてきている。より多くの人々が長寿を体験できる、といったプラスの影響だけではない。一層の高齢化が進む今日、高齢者のおかれた経済的、社会的状況を考えると、困難で重大な局面も同時に進行している。例えば、次のような状況が考えられる。

1つは、高齢者にとって、職業生活から得られる満足や充実感が少なくなっていること。技術革新の今日の急速な進行は国民所得の上昇や過重な肉体労働からの解放をもたらした。だが、他方で、その技術水準の高度化は、若者に比べて、高齢者の就業の困難性を高めた。

2つに、昭和30年代以降のわが国の経済の高度成長は高齢者に対する福祉施策

## 246 自由投稿

の充実を可能にしたけれども、今日の低成長の経済状況を反映し、高齢者の量的拡大に対応しきれずに、その福祉施策等には後退の方向にあるものもみられる。

3つに、核家族化状況の進行を指摘できる。産業構造の変化や家族意識の変容に伴い、都市部、農山村部を問わず、三世同居型の家族形態は減少している。独居老人とか、高齢者夫婦のみの家族形態は今日一般化した。このために、家族内での高齢者の地位や役割は変容し、また、わが国に伝統的に定着していた家族収容型の老人扶養も困難になってきた。<sup>(2)</sup>

4つに、都市化の進行がもたらした伝統的な地域共同体の崩壊は、それまでの地域社会での高齢者の役割や地位を低下させ、地域社会への参加活動の場面を狭め、高齢者の地域生活を貧弱なものとしてきた。

これら的高齢者をとりまく諸条件・状況の変化によって、高齢者には、次のような問題が生まれてきている。

1つに、社会からの、あるいは、家族からの孤立化傾向が進行すること。

2つに、心理的レベルでの孤独感、疎外感の進行である。

3つに、職業生活からの引退をはじめ各種の社会参加活動の機会が減少し、参加意欲の減退、社会への無関心、活動への無感動が引き起こされてくること。

こうして、今日、高齢期を生きる者は、次第に、生活の中に満足や充実感、生きがい感をみいだしにくくなる状況に直面しつつある。このため、高齢者が自己の生活の諸課題に積極的に取り組み、充実した高齢期を送ることを可能にするような諸方策の検討・確立が、今日、要請されるだろう。そこで、本稿では、主に、次の3点からこの課題に接近していく。1つに、今日の高齢者は高齢期の生活をどう設計・構想し、どう送ろうとしているか。2つに、職業生活から引退していくこの高齢期には、余暇生活の比重は増大するが、生活の中心となる余暇活動はどのような役割を担うか。3つに、高齢期における学習（教育）の役割と学習活動の進展の方向性を検討していく。

### 1. 調査の対象・方法

以上の問題を、本稿では、高齢者を対象に実施した調査結果をもとに検討していく。ところで、今日の時点で、高齢者とはどのような特徴をそなえた者をさしているかとか、高齢期とはどのような人生の時期・段階であるかについて、明確な合意はみられない。確かに、人生の最終の段階を高齢期とよび、この時期に位置する人々を高齢者とよんではいる。だが、具体的に、60歳とか65歳といった年齢とか、職業生活からの引退とか、精神的な老いとか、社会的活動の程度といっ

表1 回答者の性別・年齢別構成

年 齢 性 別	60～64	65～69	70～74	75～79	合計
男 性	24.0 (128)	26.1 (139)	23.1 (123)	26.8 (143)	100.0% (533人)
女 性	22.0 (99)	26.4 (119)	24.6 (111)	27.1 (122)	100.0% (451人)

た指標で区別される人々を、高齡者とよぶのか、その基準は一義的に定められていない。<sup>(4)</sup>当然、高齡期の出発点の基準も同様である。

そこで、職業生活からの引退年齢および国民の平均寿命を視野に入れて、高齡者として、60～79歳の者（明治39年から大正14年生まれ）を調査対象に選定し、実施することにした。<sup>(5)</sup>愛媛県松山市（人口約42万人）で、無作為抽出法で、1,600人（男女各800人、年齢区分は5歳間隔で各400人）を、サンプリングし、984人から有効回答（有効回答率61.5%）を得た。調査は、郵送法で、1985年7～8月に実施した（表1参照）。

## 2. 高齡期の生活

### (1) 人生の送り方

高齡期をどのように迎え、どのように送るかは、高齡化社会を生きる者にとって、重大な課題の1つである。かつての人生50年時代と呼ばれた社会では、高齡期を迎えることのできた少数の人々は、ただ高齡者であるとか、以前に社会に貢献したという理由で、若い世代の者から敬意を受け、社会で扶養される立場にいた。このため、人々は高齡期の生活やその生き方を予想したり、構想して、成人期を送るといったことは少かったと思われる。しかし、今日では、高齡期に予想される生活を高齡期に入るかなり前に考えておくことが当然だとされている。例えば、趣味をもっておくとか、健康に生きるとか、年金等の経済生活を確実なものにしておくなど、<sup>(6)</sup>生活のあらゆる面にわたり、高齡期の生活を前提とした人生設計の論議がみられるようになってきた。

そこで、本調査の対象者である高齡者は、自分自身のライフサイクルの中に、高齡期をどのように位置づけ、高齡期に至ったかを、まず、みってみる。結果をみると、「しっかり計画をたてて送ってきた」者が10.9%、「まあまあ計画をたてて

表2 人生設計の計画性と現在の生活の幸福度

幸福度 人生設計	かなり幸せな 生活である	まあまあ 幸せなほう	幸せなほう ではない	計
しっかり計画を 立てて送ってきた	50.0 ( 51 )	44.1 ( 45 )	5.9 ( 6 )	100.0% (102人)
まあまあ計画を もって送ってきた	19.7 ( 96 )	67.2 (328)	13.1 ( 64 )	100.0% (488人)
ほとんど考えな かった	17.8 ( 60 )	59.3 (200)	22.8 ( 77 )	100.0% (337人)

注)  $P < 0.001$  で有意な差が認められる。

送ってきた」者が50.2%。すなわち、約6割の者に、人生の送り方に計画性が認められる。しかし、逆にみると、現在の高齢者の約3人に1人は高齢期の人生設計をもたずして高齢期に至っている。なお、この結果を、男女別、年齢別、学歴別にみても、統計上有意差は認められなかった。

さて、有意な差が認められたのは、「高齢者各人の現在の経済的な生活水準」との間である。すなわち、「現在、かなり余裕のある生活を送っている」と考える高齢者では、73.3%の者に、また、「まあまあ余裕のある」と考える高齢者では、73.2%の者にこうした計画性が認められた。だが、「現在の生活に余裕が少い」と考える高齢者の中で、計画性の認められるのは、46.6%に過ぎない。つまり、生活設計に基づいた高齢期の送り方をしているかどうかは、高齢期の経済的な豊かさと、一定の相関がある。また、表2は、同様に、この高齢期の送り方と、現在の生活での満足度合との関連性をみたものである。明らかに、計画性をもって高齢期を迎えた者ほど、現在の生活に対する満足度も大きい。このことから、高齢期を幸福に送るには、それまでの人生を無為、無目的に送ることなく、一定の計画性をもって高齢期に入ることが重要だといえる。

では、具体的に、計画のなかに盛り込まれる必要があると考えられているのはどのようなものか。これを示したのが、表3である。最も選択率が高いのは、男女とも、「健康の維持・増進」である。その他では、男性では、「経済」、「仕事を続けること」、「学習態度」の選択率が高く、女性では、「経済」、「家族」、「友人」が高い。男性では、経済面の充実を、女性では、人間関係を重視する傾向にある。

さらに、「現在、幸せな生活を送っていると感じているかどうか」との関連で、

結果をみると、「かなり幸せ」と感じている者では、順に、「健康」(36.5%)、「経済」(27.4%)、「学習する態度」(24.5%)、「仕事」(18.8%)、「家族」(17.8%)。他方、「不幸なほう」と感じている者では、「健康」(51.9%)、「経済」(34.9%)、「友人」(18.9%)、「家族」(11.3%)の順である。この結果から、1つに、現在の生活を不幸であると感じている高齢者ほど、回答が健康と経済に集中し、幸せだと感じる者の選択は分散化する傾向にあることがわかる。言いかえると、健康と経済という要因が高齡期の生活をかなり規定していることを読み取れる。2つ

表3 高齡期の生活を充実させるためにやっておくべきもの (%)

	男 性	女 性	全 体
健康の維持・増進をはかっておく	42.6	41.5	42.1
公的扶助にたよるだけでなく、自らも経済的基盤をつくっておく	32.0	23.0	27.9
心からつきあえる友人をつくっておく	13.5	20.2	16.5
家族(子どもや孫)との交流を深めておく	11.5	21.5	16.0
常に学習する態度をみにつけておく	15.0	15.1	15.0
仕事に打ち込み、できるだけ続ける心がまえをもっておく	19.7	6.0	13.5
余暇の楽しみ方をみにつけておく	12.7	12.2	12.5
宗教・信仰を大切にする	9.7	15.1	12.2
親戚・兄弟づきあい	3.6	4.9	4.2
近所づきあい	2.7	4.8	3.6
そ の 他	0.2	0.2	0.2
高齡期に考えてもおそくない	0.6	1.1	0.8
計	163.8	165.6	164.5

注) 回答形式は、2つ以内の選択回答

に、幸福に感じる者ほど「学習する態度」の選択率が高くなる傾向がわかる。これから、高齢期の生活の充実に「学習する態度」のもつ役割の重要性が示唆される。

## (2) 高齢期における生活の充実

高齢者は現在の生活を充実させるために何を求めているか(表4)。選択率のとりわけ高いのは、「健康の維持」であり、高齢者にとっていかに健康への関心が大きいかがわかる。なお、高齢期に入るまでには考慮すべき重要な要因であった「経済的安定」は、高齢期では充実が求められる要因とはそれほどなっていない。また、「近所づきあい」とか、「社会奉仕活動」といった地域活動や社会参加活動への関心は低い。

なお、年齢段階別に少しみると、「健康」はとくに70歳代で選択率が高い。「子供や孫との交流」は60歳代後半以降で、「余暇生活を楽しむ」は65～74歳で、そして、「経済的安定」と「仕事」は60歳代前半、ついで60歳代後半で選択率が高い。このように、高齢期においても、その段階で充実を望む条件にはかなり違いがみ

表4 現在の生活で、最も充実したいもの・望んでいるもの

(1つ選択；%)

年 齢	60～64	65～69	70～74	75～79	全 体
健康の維持	30.4	31.8	37.6	33.2	33.2
子供や孫との交流	7.5	12.4	13.2	12.5	11.5
余暇生活(旅行・趣味など)	7.5	14.3	12.0	7.9	10.5
経済的安定	15.4	9.7	6.0	7.9	9.7
自分の能力を生かせる仕事をする	12.8	10.9	6.8	5.7	8.9
配偶者との生活	7.5	6.6	6.8	6.0	6.7
信仰・宗教	5.3	2.7	4.3	6.4	4.7
友人・知人との交流	4.0	3.9	3.0	4.5	3.9
社会奉仕活動	2.2	0.4	0.9	1.1	1.1
近所づきあい	0.4	1.2	0.4	1.9	1.0
学習活動	0.4	0.8	0.4	0.4	0.5
国家・社会の発展	0.4	0	0.4	0.4	0.3
そ の 他	1.3	2.7	2.6	4.5	2.8
無 答	4.8	2.7	5.6	7.5	5.2

られる。

さらに、「現在、幸せな生活を送っていると感じているかどうか」との関連で、結果をみると、幸せに感じている者ほど、「健康」、「仕事」、「子どもや孫との交流」、「余暇を楽しむ」等に選択が分散化する傾向にある。他方、幸せに感じていない者ほど、「健康」と「経済的安定」に選択が集中化する傾向がみられる。このように、高齡者が充実を望む課題には、その高齡者のおかれた位置がよく反映されている。

ところで、高齡期には、どのようなことに不安を感じているか。高齡期には、それまでの生活の中心であった職業生活からの引退とか、家庭内での地位や役割の変化等、各種の変化を経験するために、心理的にも不安を感じることが多くなることが予想される。そこで、こうした不安を解消したり、軽減したりすること

表5 日常生活で、いやなこと、不安なこと、避けたいこと

(%)

選択順位	第1位	第2位	第3位	合計
健康を害すること	42.4	20.3	7.0	69.7
年寄り扱いをされること	14.7	3.1	5.0	22.8
経済的に貧しくなること	10.2	10.8	8.2	29.2
身の回りのことが自分でできなくなること	9.5	15.9	15.5	40.9
配偶者の病気	6.8	10.1	12.9	29.8
精神的にふけこむこと	3.1	8.2	9.6	20.9
家族や周りの人から大事にされなくなること	1.4	4.0	3.4	8.8
夫婦間の不和	1.2	3.1	3.1	7.4
何もすることがないこと	1.0	3.3	7.0	11.3
退職すること、仕事をやめること	0.9	3.7	2.1	6.7
たよるべき子供夫婦との交流の乏しさ・別居	0.6	1.7	2.3	4.6
緊急時の援助者がいないこと	0.4	0.4	2.0	2.8
信頼できる友人がいないこと	0.3	2.9	2.0	5.2
近所づきあいがいないこと	0	0.1	1.0	1.1
その他	0.2	0	0.5	0.7
無 答	7.2	12.5	18.5	—
計	100.0	100.0	100.0	—

## 252 自由投稿

は、当然、高齢期の生活の充実にとって必要なことである。

では、高齢期の不安の源泉は何か。本調査では、「日頃の生活の中で、いやなこと、不安なこと、避けたいことは何か。」という設問で回答を求めた。回答は1位から3位まで順位をつけて求めている（表5）。

この結果から、高齢者が感じる不安を大別すると、次の3つが考えられる。1つは、健康（身体的な衰弱）等の条件により、それまでの自立的な生活がそこなわれはしないかといった不安。この不安はとりわけ大きい。2つは、経済的な保障がたもたれるかといった不安。3つに、若い世代から年寄りだといった価値判断的な見方や処遇がなされることを恐れた不安。これに対して、「信頼できる友人がいない」とか、「何もすることがない」とか、「近所づきあいがいい」とか、「子ども夫婦との交流の乏しさ」等に不安を感じる者は少い。すなわち、これらの条件が充実しているために不安が感じられないのか、それとも、健康と経済的安定以上には、高齢期の生活で重要な要因となりえないのか。こうした疑問がうまれるほど、今日の高齢者が健康と経済的安定とに向ける関心は大きい。

### 3. 高齢期の余暇

#### (1) 高齢者の喜び

日頃の生活のなかで楽しいこと、喜びと思うことを聞いた。回答は1位から3位まで順位をつけて求めた（表6）。

この結果から、次のような特徴を理解できる。1つに、高齢期の楽しみ、喜びとして、日常の生活の中で趣味活動が最も中心的なものになっていること。<sup>(7)</sup>第1位選択だけをみると、18.7%であり、高齢者の実に5人中1人の割合で、趣味活動に最大の喜びを感じている。2つに、テレビを楽しみ、喜びとする者が多いこと。とくに、第1位選択だけをみると、9.6%であるが、第2位選択で、12.4%、第3位選択で、15.2%であり、合計の選択率は37.2%に達する。つまり、テレビは趣味活動等に比べて、それほど強い喜びではないが、それに続く地位を占めている。3つに、「家族との団らん」、「友人や近所の人との交流」といった人間的な対人接触を、楽しみ、喜びとする者も多いこと。4つに、選択率の低いものとして、「地域活動（町内会活動）」、「老人クラブ・高齢者学級への参加」、「奉仕活動、ボランティア活動」等があること。これらは一面で高齢者の社会参加の低調さの現状を裏づけているだろう。

そこで、高齢期の生活での楽しみ、喜びの主要な源泉である「趣味活動」と「テレビ」について少し詳しくみていくことにする。

表6 日常生活で楽しいと思うこと、喜びと思うこと

(%)

選択順位	第1位	第2位	第3位	合計
趣味活動(俳句・お茶・お花など)	18.7	10.9	6.1	35.7
仕事をする事(農業・自営業も含む)	12.9	9.0	4.5	26.4
家族との団らん	11.9	11.6	7.9	31.4
旅行	11.0	9.9	10.1	31.0
友人や近所の人と気軽に話し合うこと	10.2	13.3	9.2	32.7
テレビをみること	9.6	12.4	15.2	37.2
ゲートボールなどのスポーツ活動	6.1	1.9	1.2	9.2
信仰・宗教	5.2	5.8	8.3	19.3
読書	4.6	7.1	9.7	21.4
老人クラブや高齢者学級への参加	1.2	2.2	2.8	6.2
地域活動(町内会活動)	1.1	1.7	0.7	3.5
奉仕活動・ボランティア活動	0.3	0.9	1.7	2.9
その他	1.8	2.1	2.3	6.2
楽しいことはとくにない	2.1	—	—	2.1
無答	3.4	11.1	18.0	—
計	100.0	100.0	100.0	—

## (2) 趣味・スポーツ活動への参加

日頃、どのような趣味やスポーツに取り組んでいるかを聞いた(表7)。高齢者の余暇活動は高齢者各人の性別や年齢や健康の程度などの要因を反映して、その実施率には多様な傾向がみられる。例えば、性別にみると、男性の方が女性より実施率の高い男性優位型として、「囲碁、将棋」「ゲートボール」等、逆に、女性の方が男性より実施率の高い女性優位型として、「和裁、洋裁、手芸、編物」、「茶道、華道」等、そして、同様に組み込まれている均衡型として、「盆栽、園芸」、「書道」、「読書」等、活動のタイプを区分できる。

同様に、年齢別にみると次の特徴がある。1つに、年齢段階が高くなるほど実施率が高まる活動のタイプ。「ゲートボール」、「俳句、川柳、短歌、和歌」等は、60歳代より、70歳代の者に取り組まれる活動である。2つに、年齢段階が高くな

表7 趣味・スポーツの実践率

(%)

	性 別		年 齢 別				全体
	男 性	女 性	60～64	65～69	70～74	75～79	
盆栽・園芸	45.0	35.1	44.8	42.2	42.2	33.3	40.5
散歩・ジョギング	44.3	27.1	39.6	36.0	38.9	31.7	36.3
読 書	36.4	25.9	30.9	36.4	31.2	28.0	31.6
和裁・洋裁・手芸・編物	0	35.9	18.0	19.4	15.3	13.6	16.4
民謡・詩吟・民踊	11.1	16.8	12.8	11.2	15.4	15.5	13.7
囲碁・将棋	17.5	0.4	7.9	10.5	8.1	11.8	9.7
写 真	14.6	3.2	10.2	11.4	9.1	7.6	9.3
俳句・川柳・短歌・和歌	8.2	8.3	7.1	6.2	10.7	9.4	8.2
書 道	8.9	5.9	11.5	7.1	6.0	6.1	7.4
ゲートボール	9.6	4.7	0.9	5.0	12.0	10.9	7.3
茶道・華道	1.0	10.4	6.1	2.8	5.6	6.8	4.7
琴・三味線・尺八	1.6	6.7	2.1	4.0	6.8	3.0	3.9
絵画・彫塑	5.3	1.6	4.4	4.3	2.5	2.4	3.5
ゴ ル フ	4.4	0	3.5	3.6	1.2	1.2	2.3
コーラス・音楽	1.9	1.4	1.2	2.0	2.2	1.6	1.7
テ ニ ス	2.7	0.4	2.1	1.2	2.6	0.8	1.6
そ の 他	9.2	4.3	9.1	7.1	5.3	5.0	6.4
何もやっていない	10.5	18.4	14.1	12.4	13.2	16.6	14.1

るにつれて実施率が低下するもの。「書道」、「ゴルフ」「絵画、彫塑」等。3つに、75歳以降に急激に実施率が低下しているもの。かなり多くの趣味活動はこのタイプに該当する。「盆栽、園芸」、「散歩、ジョギング」、「読書」等。4つに、年齢段階にあまり影響されないもの。「囲碁、将棋」、「茶道、華道」等。こうした活動のタイプ化の試みは、高齢者の活動可能性を考えたとき、高齢者を対象とした学習活動や趣味活動の展開を促進しようとするとき、考慮すべき重要な問題となろう。

高齢者は多種多様な趣味活動に取り組み、喜びや楽しみをみいだす場合が多い訳であるが、高齢者はこうした趣味活動にいかなる役割や期待を込めて取り組んでいるのか。ここでは、この問題を4つのタイプを設定して聞いた。

1. 何も期待しない。さそわれてやっているといった程度である。(ひまつぶし型)  
 .....9.5%
2. 仲間や友人との交流が深まり、また、新しい友人もできる。(仲間交流型)  
 .....27.2%
3. 健康の維持に役立つので、よいことだ。(健康増進型) .....54.1%
4. やらずにはおれないほど打ち込んでおり、自分の生きがいになっている。(生きがい追求型) .....9.2%

この結果から、今日の高齢者には、健康増進に向ける関心の大きさを反映して、健康増進を目的として趣味活動に取り組んでいる者が多いことを理解できる。確かに、趣味活動はすでにみたように高齢期の生活で最大の楽しみや喜びとなっている。ただ、高齢期の生活の中で趣味活動を生きがいの主要な対象と考え、趣味活動の中のみ生きがいを発見でき、強く生きがいを感じるといったレベルまでは、今日の高齢者は考えていない、ようである。このことから、成人期の職業活動に匹敵するほどの地位・役割を、高齢期の趣味活動がもつまでには至っていないといえる。

### (3) テレビ視聴

高齢者とテレビとの結びつきについては、最近まであまり注目されてこなかったけれども、次第に関心が寄せられてきている<sup>(8)</sup>。それは高齢者が、子供や若者、あるいは成人期の大人に比べて、テレビを最もみているといった実態が明らかにされてきたからである。これまで、テレビ視聴時間がそれほど多くない子供や若者に対して、テレビの悪影響が論議されてきたが、家にとじこもり自分専用のテレビをもって一日中テレビを見ている高齢者のテレビ視聴のあり方を論じたものはほとんど最近までみられなかった。すでにみてきたように、本調査の高齢者も、趣味活動に劣らず、テレビに楽しみや喜びをみいだしているのが現状である。

それで、ここでは、高齢者がテレビとどのように接触し、テレビからいかなる満足や充足を得ているかをみていくことにする。まず、一日平均のテレビ視聴時間を聞くと、平均時間は210分であった。自由記述で聞いた視聴時間を整理すると、120分までの者が33.1%、121~180分が21.5%、181~299分が20.7%、300分以上が24.7%である。つまり、4人に1人は1日平均6時間以上テレビを視聴していることになる。そして、95人(9.5%)は家にいる時には1日中テレビを視聴する生活を送っている。なお、ほとんどテレビをみていないと答えた者は、984人中21人(2.1%)に過ぎない。

同様に、高齢者のテレビへの接触の程度を、本や雑誌などに代表される活字メディアとの比較でみたのが、表8である。テレビを好む者が全体で過半数を超え

表8 活字メディアか、テレビか

(%)

	テレビ のほう	本や雑誌 のほう	どちらとも いえない	計
男性	45.9	19.4	34.7	100.0
女性	57.7	13.1	29.2	100.0
全体	51.3	16.5	32.2	100.0

注； $P < 0.001$ の水準で有意差が認められる。

ており、高齢者の活字離れ現象は、視力減退をさし引いても、顕著である。しかも、この傾向は男性に比べて女性の方によくみられる。なお、年齢段階別には有意な差は認められなかった。

では、高齢者の生活にとって、テレビはどのような役割を担っているのか。ここでは、次の設問、「あなただけがテレビをみられなくなったり、みないように強制されると、生活はどう変わるとお思いますか。」によって、その役割を聞いた。まず、生活全体が貧弱なものになるだろうというテレビ必要型の者が、59.2%。とりわけ、テレビがみられないと、退屈やさみしい時間がふえて、楽しみが減るといった理由が選択されている。これに対して、そうなった場合には、テレビ以外の活動に積極的に取り組むと答えた積極的転換型の高齢者は26.6%。そうなった場合にも、現在の生活になんら変化がないだろうとする不変型の高齢者は10.5%である。

この結果から、積極的転換型や不変型の高齢者の割合はそれほど多くないことがわかる。すなわち、テレビ必要型の割合が大きく、多くの高齢者の生活にテレビは深く浸透しており、テレビのない生活は無為な時間をつくり、時代遅れや話題の乏しい高齢者を生み出す原因となるだろうと考えられている。

このことは、「日頃の生活の中で、社会と結びつきを感じるのはどんなときですか。」(2つ以内選択)という設問で、高齢者の社会に対する関与意識、参加意識の源泉をさぐると明らかとなる。表9の結果をみると、テレビに社会との結びつきを求める高齢者が圧倒的に多い。もちろん、社会との結びつきを感じないという高齢者は極めて少いが、高齢者の喜びや楽しみとなっている「趣味活動」が7.1%に過ぎないことを考えると、高齢者と社会との接点としてのテレビの役割がい

表9 社会と結びつきを感じる時

(%)

テレビでニュースなどをみるとき	51.0
近所の人と気軽に話し合うこと	22.5
仕事をしているとき（家事は除く）	16.1
宗教・信仰	14.9
買物などで町の中心街に出かけること	12.3
家族との団らんの中で	10.6
地域活動（自治会等）に参加しているとき	7.1
趣味活動をおこなっているとき	7.1
老人クラブ・高齢者学級への参加	7.0
地域の祭や行事に参加しているとき	6.5
ゲートボールなどのスポーツ活動をしているとき	5.9
その他	1.8
社会との結びつきを感じない	1.7
無 答	7.3

かに大きいのか、容易に理解できる。職業生活から引退することにより、社会への参加意識を喪失し、孤独感、孤立感を感じやすい高齢者にとって、他の世代に比べても、テレビの存在価値はとくに大きいだろう。ところで、こうした高齢者のテレビに対する期待の大きさは何によってもたらされているのか。それは高齢者が日頃のテレビ視聴から得ている満足や充足感の大きさによるのではないかと予想される。そこで、高齢者が日頃どのような満足や充足を得ているかをみる。D.マクウェールの利用満足理論を参考にし、テレビから得る充足の内容を、気晴し、人間関係、自己確認(自己開発)、環境の監視、に分類した充足タイプロジーを用いて明らかにしようとしたのが、表10である。なお、設定した20の項目は本調査のために考案したものである。

さて、最も充足の程度が大きいのは、環境の監視のタイプロジーに関するものである。これは、広い範囲の世界での出来事に関する情報と意見を獲得すること、つまり、世の中の出来事を知ることに関連している。高齢者の加齢とともに、職業生活からの引退、身体的運動能力の低下による行動範囲の縮小、社会参加活動の減少が通常進むわけであるが、テレビのこうした情報獲得の媒体としての役割

表10 テレビの利用と満足

(%)

	よ あ	く る	ま あ ま あ る	あ ま り な い	ほ と ん ど な い	無 答	合 計	
番組をみて、笑ったり、悲しんだり、胸をどきどきしたりして、楽しい時を過ごせる	38.1		40.1	12.9	4.6	4.6	100.0	(気 晴 し)
毎日の生活の退屈や不安を忘れてくつろげる	33.1		41.1	14.0	6.3	5.2	100.0	
静かであるよりも、テレビから人の声や音楽が聞こえてくるほうが安心である	19.9		27.9	23.0	22.4	6.8	100.0	
番組についつい夢中になり、時間が過ぎるのを忘れる	14.8		25.4	33.1	19.3	7.3	100.0	
いやなことがあったときでも、テレビをみると、すっきりした気持ちになる	12.2		28.9	32.5	19.7	6.7	100.0	
日頃、友人との話しの中で、共通な話題となったり、話の種になる	27.1		39.1	18.4	9.7	5.7	100.0	(人 間 関 係)
家族と一緒に楽しみをわかちあえ、団らんのもりがあがる	24.5		35.8	19.9	12.6	7.2	100.0	
若い青少年の考えや行動を理解できる	21.0		46.3	20.7	6.2	5.7	100.0	
友人と楽しい世間話をするのと同じような気持ちになる	12.3		30.1	33.6	17.5	6.5	100.0	
番組の中の人(司会・タレント・歌手など)が自分の親しい人のように感じる	11.9		25.5	35.1	21.3	6.2	100.0	
社会や家庭の望ましい姿を考えさせられる	37.3		42.3	11.9	2.9	5.6	100.0	(自 己 確 認)
自分の今後の生き方を考えさせられる	33.5		35.7	18.1	7.5	5.2	100.0	
自分の今まで(人生)に起ったことを思いおこさせる	30.7		41.0	18.1	5.7	4.6	100.0	
自分の経験したこともない、他人の悩みや喜びのいくつかを理解させてくれる	29.1		48.9	12.0	3.9	6.2	100.0	
自分の考えていたことが正しいかどうか、みんなと同じかどうか確かめることができる	27.0		42.6	18.1	5.2	7.2	100.0	
知らなかったことを知り、視野がひろがる	59.0		31.0	3.6	2.4	4.0	100.0	(環 境 の 監 視)
世の中の変化を身近に感じることができる	54.2		35.7	4.9	1.0	4.3	100.0	
政治や経済などの動きがわかり、自分の考え方の参考にできる	42.3		36.3	13.3	3.8	4.4	100.0	
生活にいかせる実用的知識がえられる	33.5		41.5	15.7	4.0	5.4	100.0	
新しいことを考える手がかりが与えられる	30.2		38.5	21.4	4.2	5.7	100.0	

や機能に対する高齢者の期待は今後とも増大するだろう。

次いで、満足度の高いのは自己確認のタイポロジーに関するものである。これは、高齢者が生活の中で重要なことを考えたり、また、改めてはっきりさせるなどに対してテレビのもつ貢献に関連したものである。

なお、気晴しと人間関係のタイポロジーでは、前2者に比べて、高い満足度が示されていない。これは現在のテレビ番組の問題として、高齢者向けの番組が少いことにも起因しているとも思える。高齢者が夢中になり、時間の過ぎるのを忘れるような番組とか、親近感をもてる番組等が少いことによる。長時間視聴の傾向が他の若い世代に比べて強い高齢者にとって、満足できない番組を視聴しつつ高齢期を送ることは避ける必要があるだろう。より満足感や充足感を得るためのテレビ視聴のあり方の検討が必要であろう。

#### 4、高齢期の学習

##### (1) 学習機会

社会教育で、高齢者にひらかれた学習の機会として、公的なものは高齢者学級（高齢者教室）である。これは昭和48年から文部省による開設補助で、その振興がはかられている。本調査を実施した松山市の場合にも、公民館で高齢者学級が開設されている。では、本調査の回答者である高齢者は高齢者学級にどの程度参加しているか。参加していると答えた者は、17.5%（男性15.4%、女性20.0%）。以前は参加していたが、今は参加していない者が、7.0%。全く一度も参加した経験のない者が、63.1%。そして、無答が、2.4%。つまり、高齢者学級への参加経験者は約4人に1人の割合である。

さらに、「現在、参加している」者の比率を年齢段階別にみると、60歳代前半4.6%、60歳代後半9.8%、70歳代前半22.1%、70歳代後半31.8%。加齢とともに参加率も上昇している。ここで、学級参加への促進に影響している要因を探ると、次のことが統計上明らかになった。すなわち、この加齢という要因に加えて、1つに、身体的に健康な者ほど、2つに、経済的に余裕のある者ほど、3つに、現在の生活を幸せだと感じている者ほど、そして、4つに、自ら老いを自覚する程度が大きくなるほど、学級によく参加する傾向がみられる。しかし、性別とか、学歴水準とか、一日平均のテレビ視聴時間等は学級参加を規定する要因とはなっていない。こうした学級参加の規定要因から考えて、身体的に病弱者、経済的に余裕の少ない者、現在の生活に幸福感をもてない者、そして、老いを自覚しないほど精神的活力にあふれた者に、学習機会をどのように提供、保障していくかが、

高齢期の教育の重要な課題となるであろう。

それで、現在高齢者学級に参加していない者がいかなる理由で参加していないかをみていく。回答率の高い理由を順に示すと、次のようである。

1. 仕事の関係で時間がない……………24.4%
2. 学級の案内や通知が届かない……………22.4%
3. 学級に参加する年齢に達していない……………19.5%
4. 身体が弱いので参加できない……………18.3%
5. 今さら学習する気持がない……………11.8%
6. さそいあって参加する友人がいない……………10.5%
7. 自分の興味あるテーマでない……………6.7%
8. 学習をはじめするには、自分には基礎的素養が欠ける……………6.4%
9. 魅力ある講師、話しを聞きたい講師でない……………5.4%
10. 会場まで遠い……………3.3%
11. 何か学んでも、それが何の役に立つかわからない……………1.3%

以上の結果から、不参加の主要な理由を次の3つに整理できよう。1つに、学級参加のための時間確保の困難性。その主要なものは仕事と家事にある。2つに、学級に関する正確で有効な情報の伝達経路の欠如。例えば、学級に関する案内通知が届かないなど。3つに、高齢者各人の個人的条件。例えば、身体的条件とか、学習仲間の不在、学習意欲の欠如など。学習機会の拡大には、こうした不参加の理由を踏まえ、例えば、学級開設の時期や時間への配慮、学級や学習の情報に関する有効な広報、高齢者個々人の個別的条件に対応できる学級の運営などに、改善努力も必要であろう。

## (2) 高齢者学級に対する満足度

高齢者学級への参加意識をみるために、ここでは、以上報告してきた調査とは別に、とくに松山市の高齢者学級参加者を対象として実施した調査結果を中心に述べる。この調査は、1984年10～11月に、参加者1,500人を対象に質問紙による郵送法で実施。有効回答者は928人(有効回答率、61.9%)。回答者の内訳をみると、性別では、男性45.4%。女性54.6%。年齢別にみると、60～64歳4.4%。65～69歳17.7%、70～74歳34.5%、75～79歳26.8%、80歳以上16.6%。参加者の中心が70歳代である。

松山市での高齢者学級は、小学校区を単位とする33の地区にある公民館で、毎年開設されている。例えば、A公民館の場合。期間は7月23日から9月4日までの月曜日毎に、6回開講。1回当りの受講時間は2時間。対象者は地区の高齢者約100人。運営は地区の老人クラブも協力し、プログラム作成から講師の選定まで

自主的に進めている。その第1回をみると、テーマは「歴史と人生」、講演形式で実施。以後のテーマは、「交通安全対策」、「新しい時代の人間関係」、「身近な法律相談」、「心の健康」、「身の回りの生活医学」。なお、第2回の映画を除きすべて講演形式。他の地区での高齢者学級もほぼ同じようである。例えば、33地区のうち24地区から学級運営に関する意見聴取を実施したが、テーマ別にみると、歴史的分野はすべての公民館の学級で開設されている。ついで、「健康問題」が20館、「生きがい」が17館、「交通安全」が16館、「史蹟めぐり等の野外見学」が13館、「時事問題」が8館、「同和教育」が7館など。特定のよく実施されるテーマがある。講師も特定の者に集中する傾向がみられる。また、学習の進め方をみると、映画を組み入れたり、レクリエーションを取り入れたものもあるが、圧倒的に講義・講演形式が多い。

逆に、体験型や見学型の学習活動とか、参加者の集団討議や意見発表等を取り入れた学習活動は少いといった特徴もみられる。また、「地域活動への参加」「宗教」「法律」など、高齢者の学習の必要課題だと思われるテーマをとりあげている公民館はわずかに1館に過ぎない。社会や地域に何か役立つことをやりたいといった社会参加意識や奉仕意識が、調査対象者の中で、男性で35.1%、女性で19.9%を占める現状を考えると、こうした学習要求に応える内容も今後一層必要となろう。とりわけ、高齢者の社会参加意識を高める地域活動や奉仕活動などに関して、基礎的知識や技能の習得を可能にするプログラムの開発も必要である。それも、ただ講義・講演形式で進めるだけでなく、参加者自らが問題を発見したり、問題解決の過程を体験できる多様な学習方法の導入も、今後の学習の進展の方向の1つとして重要な課題となろう。

では、参加者は現在参加している学級にどの程度の満足を感じているのか。1984年度に開設された学級に対しては、「非常に満足」(36.4%)、「まあまあ満足」(58.0%)、「あまり満足しなかった」(3.2%)、「かなり不満」(0.9%)、「無答」(1.6%)、数値をみる限り、参加者の満足度は大きい。

さらに、表11は、その満足の内容をみたものである。Aの領域は、高齢者の学級参加による課題達成的な内容を、Bの領域は、情動的な内容を示している。結果をみると、Aの領域では、講師の話す内容の有益性に評価が高い。しかし、参加者個々人の抱えている疑問点の解決とか、自分の考え方が確認されるといった点では、少し満足度が低い。これは学級の運営の仕方とも関連があるだろう。例えば、どの公民館の学級とも、テーマが毎回異なり、内容の系統性に欠けるといった問題点とか、多様な興味・関心を示す多数の参加者に講義中心のやり方では十分に対応できないといった問題点によるだろう。Bの領域で、評価がとくに高

表11 高齢者学級への満足度

(%)

	全くそ う思う	まあま あそう	あまり ない	ほとん ど思わ ない	無 答	全 体	
生きがいとなる	43.0	35.0	11.1	2.4	8.5	100.0	
講師の話がおもしろくてため になる	67.6	25.5	1.8	0.4	4.8	100.0	(A)
知らなかったことを知り、視 野がひろがる	56.4	31.1	5.0	0.6	6.9	100.0	
今日の社会のうごきがわかる	41.4	35.1	10.7	2.6	10.2	100.0	
講師の話が日頃自分の思っ ていることによくしており、役 立つ	36.1	39.8	9.0	1.1	14.0	100.0	
講師の話が核心をついていて、 疑問に思っていたことの答え になる	23.3	36.2	19.0	1.9	19.6	100.0	
楽しいひとときをすごせる	53.6	30.9	5.6	1.0	8.9	100.0	(B)
気分てんかんに役立つ	45.6	38.5	3.5	1.5	11.0	100.0	
日頃の生活をふりかえてみ るよいきっかけになる	47.1	31.5	10.4	1.6	9.4	100.0	
生活にハリができる	36.7	32.6	14.5	2.4	13.8	100.0	
余暇時間を有効につかえる	37.9	32.2	11.2	1.9	16.8	100.0	

いのは、日常的な生活から離れた学級という場で、解放された楽しい雰囲気を楽しむという点である。

ところで、「時代に遅れないようにいろいろ学びたい」とか、「日頃聞けない話を聞きたい」とか、「友だちや参加者といろいろ話をしたい」とか、「生活にハリやリズムをもちたい」といった期待をもって学級に参加している高齢者は、現在

の高齡者学級からもかなりの満足を得ていると思われる。しかし、「日頃、わからなくて困っていることをわかりたい」とか、「今後、何か生きがいになるものを見つけない」といったように、積極的な参加意欲をもつ者を受け入れ、満足や充足感を与えていくには、今後、多大の改善への努力も必要と思われる。

## 5. おわりに

最後に、これまでの考察から得られた結果をもとに、高齡者が自己の生活課題に積極的に取り組み、高齡期の生活を充実させるための方向性にかかわる問題を提示しておく。

1つに、高齡化社会では、高齡期に至る以前に、高齡期の生活を自らの人生の中で設計・構想する必要性を指摘できる。それは、たんに経済的な側面だけでなく、生活全体にわたる構想である。現在、高齡期にある者では、こうした計画性をもって高齡期を迎えた者ほど、より充実した生活を享受し、満足していることが明らかとなった。計画性をもって積極的に高齡期を送る構想を各人が打ち立てるには、高齡期の前の段階の成人期の教育に期待されるところが大きい。そこで、高齡期の生活課題に対応できるような成人期の教育が必要であろう。

2つに、今日の高齡者は、高齡期の生活を充実させる条件として、とりわけ「健康」と「経済的安定」を評価する傾向にある。しかも、現在の生活に幸福感をもてない者ほどその関心が高い。だが、こうした関心はいわば内向きの自己にだけ向けられたものに終始し、逆に、社会に対する関心の欠如を生みだし、地域活動、奉仕活動、近所づきあいといった社会参加や地域の中での人間的な対人接触の機会を狭め、高齡期の生活を一層孤立化したものにしていくといった今日の高齡者問題とも無関係ではない。このためにも、今日の高齡者の生活課題の1つである社会的関与意識・参加意識を育てる教育の計画化が期待される。

3つに、高齡期における余暇活動は今日の高齡者の生活に最も大きな楽しみや喜びを提供している。しかし、高齡者の生きがいの対象にはそれほどなっていない。この点では、成人期における職業活動が生きがいの対象となりえているのとかなり違っている。そして、趣味活動に比べて、テレビは高齡者の生活に深く浸透している。高齡者にとって、テレビから得る楽しさや喜びの源泉はテレビを媒介として、社会との結びつき、社会への参加意識を維持しているところにある。これは環境の監視のカテゴリーにおいて最大の満足、充足を得ているところからわかる。しかし、テレビから得られる経験は間接的な経験であり、この間接経験の肥大化傾向がはたして高齡者の直接体験としての社会参加活動の可能性をひら

くかどうかという点で問題も残されている。こうした可能性をひらくことに寄与できるようなテレビを学習媒体とした学習活動のあり方が問われるだろう。

4つに、学習機会としての高齢者学級はそれに参加した高齢者に多大の満足を与えている。しかし、参加した高齢者の多くは、健康に恵まれた者、経済的に余裕のある者、現在の生活に幸福感をもつ者、老いを自覚している者である。このために、高齢者学級が高齢期にあるすべての人を対象にしていくことが可能であるかという問題の検討は残されている。また、参加者の学級への期待は、必ずしも生活の中で直面している諸問題の解決にあるのではない。現状をみる限り、一般教養的内容と参加仲間との人間的な交わり（人間関係の形成）にある。特定の学習課題を追求するといった積極的な学習態度を示す高齢者に、その学習機会の十分な保障という点では、今後の充実が望まれるところである。

〔注〕

- (1) 金井久夫「高齢化社会における諸問題とその対応策」東京都議会議員会局編『高齢化社会への対応』1982年、1～4頁参照。
- (2) 松原治郎「高齢化問題にどうとりくむか」松原治郎編『日本型高齢化社会』有斐閣、1981年、8～9頁参照。
- (3) 例えば、宮城晋弥『人間年輪学入門』岩波書店、1982年。ダニエル・J・レビンソン、南博訳『人生の四季』講談社、1980年など参照。
- (4) 例えば、キャロライン・バード、西岡公、朽木ゆり子訳『エイジレス人間の時代』ABC出版、1985年参照。
- (5) 高齢者の標本抽出には、松山市教育委員会社会教育課の援助を受けた。
- (6) 例えば、労働省の要請で、高齢化社会における老後生活のあり方を検討した「勤労者の老後生活安定対策研究会」の報告などはその1つである。『朝日新聞』1987年5月24日号。
- (7) L. C. ミチュエロン、牧園清子訳『ニュー・レジャー・クラス』『現代のエスプリ 老年』至文堂、1978年、118～130頁参照。
- (8) 例えば、野島正也「老人がテレビに求めるもの」副田義也編『日本文化と老年世代』中央法規出版、1984年、328～357頁参照。
- (9) D. マクウェール編、時野谷浩訳『マス・メディアの受け手分析』誠信書房、1979年参照。香取淳子「老人のテレビ視聴構造」社会老年学(No.19)、東大出版、1984年、67～76。これは利用満足アプローチでなされている。

付記 本調査は、放送文化基金（昭和58年度後期）の研究助成（愛媛県高齢者放送利用社会教育研究会〔代表者南本長穂〕「高齢者の自己実現（生きがい形成）過程にみる放送利用の研究」）を受けて実施した。